

フランス第四共和政前期(1946-54年)国営ラジオ局における音楽政策と戦争の記憶
— フランス国立管弦楽団初演作品とその評価の考察より —

田 崎 直 美

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
『人間文化創成科学論叢』第15巻(2012年)
2013年3月発行 抜刷

フランス第四共和政前期（1946-54年）国営ラジオ局における 音楽政策と戦争の記憶

—フランス国立管弦楽団初演作品とその評価の考察より—

田 崎 直 美*

Radiodiffusion Française's music policy from 1946 to 1954 and war “memories” in concerts of the *Orchestre national de France*

TAZAKI Naomi

Abstract

This paper examines one aspect of the policies on music during the early French Fourth Republic (1946-54), focusing on art music programs by *Radiodiffusion Française*, the national radio organization. I analyze the music programs performed by the *Orchestre national de France* (ON) affiliated with *Radiodiffusion Française*. The programs were aired once a week on the National Channel that aimed at protecting French heritage. The characteristics of and changes in the repertoire, as well as traces of the “memory” of the Occupation, are investigated.

In an attempt to overcome the supremacy of nineteenth-century German romanticism and to support the works of living composers, Henry Barraud, the music director of the *Radiodiffusion Française*, tried to expand its repertoire. His efforts were evident in the early ON repertoire, just after the Liberation, particularly until the demission of Rosenthal (conductor of the ON) in 1947. The ON repertoire, however, later reverted to the canonical classics. Most “war-related works”, aired intensively by 1947, have never been discussed among the critics; Direct war-related expressions were not welcomed. On the other hand, Milhaud's latest works were appreciated, being regarded as symbolic of the Liberation in spite of their neutrality.

Key words: France, radio music, cultural policy, war memory, *Orchestre national de France*

1. はじめに

第二次世界大戦中ドイツ軍に占領されたフランスは、解放直後数年間、刺激的で活発な音楽活動を一気に展開し、「創造における特異な時期」（ALTEN 2000:17）を形成したとされる。本稿はこの時期の芸術音楽活動の状況について、フランス国営ラジオ局 Radiodiffusion Française (RDF/1949年以降 RTF)（「国営ラジオ局」と略記）音楽部門での芸術音楽活動、特に同ラジオ局専属であるフランス国立管弦楽団 Orchestre national de France（以下 ON と略記）の活動内容を対象とし、国家の文化（音楽）政策や占領下時代との関連の視点より考察を行う。

戦前には国営・民間双方のラジオ局が発達していたフランスだが、ドイツ占領当局が解放直前の撤退時にフランスのラジオ局を徹底的に破壊したことにより、解放直後に使用可能な放送局はわずか4、5局であっ

キーワード：フランス、ラジオ音楽、文化政策、記憶、フランス国立管弦楽団

*平成24年度後期 リーダーシップ養成教育研究センター 講師（研究機関研究員）

た。それでも解放後フランス政府が最も介入した分野はラジオ（後にはテレビ）というメディアであった（D'ALMEIDA; DELPORTE 2003:161）。1944年11月20日法令 *arrêté* にてフランスのすべての民営放送局が国に接收、1945年3月23日行政命令 *ordonnance* にてすべての民間放送許可が廃止される。「国営ラジオ局」はヴィシー政権時代（1940-44年）の「国営ラジオ放送 Radiodiffusion nationale (RN)」に修正を施す形で、情報省の監督の下、フランス全土の放送局を独占することになった。そして戦前よりも国家管理的・中央集権的性格を強く押し出しながら、この独占は1982年まで政権交替を超えて継続する。ラジオは公的役割を担うという観念が、戦中から解放後にかけて政治指導者間にコンセンサスを持って引き継がれたのである（ECK 1997: 9）。

この時期はラジオ史の中で、「物質的な困難にもかかわらず、これほど質の高い番組が放送された時期（筆者註:1945-68）はなかった」（PROT 2007:99）とされる。国民に影響を与えるメディア自体も、解放後大きく変化した。日刊紙は1946年を頂点に数と全体部数を減少させる（D'ALMEIDA; DELPORTE 2003:161）のに対して、ラジオ受信機数は、約10年間で倍増するのである（JEANNENEY 1996:269）。フランスでは戦前から音楽番組が構成の中心であり、この性質は戦後も変わっていない。そして「国営ラジオ局」芸術部門は、諸文化組織（劇場、演奏会団体など）への国家補助金の総額とほぼ同額の予算を受けた¹。こうした点を鑑みると、「国営ラジオ局」芸術音楽番組とその方針は、第四共和政時代（1946-1958年）のフランスの音楽政策の場とみることができるのである。

パリ解放後のONは、フランスを代表する一流のオーケストラとして、「国営ラジオ局」が自国文化の保護を使命に掲げた「ナショナル・チャンネル *chaîne nationale*」で毎週放送されていた。本稿では「国営ラジオ局」の音楽政策を先行研究と史料調査から検証すると同時に、このONでの演奏作品を独自に調査・分析することで、日常的に放送された音楽作品に戦争・占領の影響が反映されていたのか、そして政策として戦争の記憶を留めようとした痕跡があったのか、考察を行う。なお対象期間は原則として、ラジオ放送新体制（Office Français de Radiodiffusion）が成立した1946年より、視聴覚放送に変化が訪れた²1954年までとする。なお1954年はパリ解放10周年でありON設立20周年にあたる。

2. 「国営ラジオ局」（1946-54年）の芸術音楽政策

2.1 ラジオ芸術音楽番組制作に関する方針の概要

パリ解放直後「国営ラジオ局」は、国の秩序づけの支援、そして「フランスの精神 *l'esprit français*」の再生の支援、という使命を明確に打ち出していた。その後1946年1月ド・ゴール退陣以降、9月にOffice Français de Radiodiffusionが発足、ラジオ局が再編される。ここでは確固たる理念・指針に従った運営よりもむしろ暫定的かつ必要に応じた運営となる³。芸術番組にはニュース番組ほど政治的介入はなかった。それでも議会は、フランス文化の威光や創造を政府がより一層保護するべきだと要求し、番組への予算に関与していた（ECK 1997:593, 608）。番組制作に関しては、ラジオ総局長ヴラディミール・ポルシェ（PORCHÉ, Wladimir: 在任1946-57）が大きな影響力をもっていた。彼は同年7月に「音楽委員会 *comité de la musique*」を設立⁴、番組に「道徳的保証をあたえ、身びいきや閉鎖性から守る役割」を担い、「国営ラジオ局」に送られてくる多数の文章や作品を審査した⁵。1950年からは、行政監督が番組制作への直接介入を開始する。行政監督は、ラジオの専門家である各監督に番組操作を任せつつも、公共サービスの倫理を順守しているかどうかを監視した（*ibid.*:594, 637）。そして同年11月、先の委員会はより公的な立場として「番組委員会 *comités de programmes*」となる。ただし委員会は諮問機関に留まり、番組の最終決定に至る総合的視野を持ちえるのは各部門の監督だけであった。したがって番組方針決定には、実際のところラジオ総局長と監督の権限に依るところが大きかった（*ibid.*:613-621）。

「国営ラジオ局」芸術部門監督ポール・ジルソン（GILSON, Paul: 在任1945-63）は、「ラジオの芸術番組制作は、その芸術分野における重点的国家プロジェクトの一つである」（MÉADEL 1999:155）と述べている。解放後の「国営ラジオ局」は、娯楽で多くの聴衆を惹きつけた戦前の民放とは性質を異にして、国民教育という要素を強く打ち出した。音楽番組に関してみると、「国営ラジオ局」は1948年ラジオ専門雑誌への記事⁶で、「高水準の」芸術音楽番組が、特に田舎に住む人や若者に対して教育的価値と機能を持ち、嗜好や有意義な余暇の形成に貢献

する、と主張している（田崎 2011:104）。芸術部門の下位部門として音楽部門があり、音楽監督はアンリ・バロー（BARRAUD, Henri: 在任1945-51）であった⁷。彼の方針の一つは、19世紀ドイツ・ロマン主義音楽からの脱却と18世紀以前のフランス音楽の復興であった。彼は1945年7月11日の音楽系公式記者会見で、「ドイツ占領下における体系的な政策とそれ以前の無意識的な政策のために」多くの聴衆の関心が19世紀ドイツ・ロマン主義音楽一辺倒になったこと、しかし19世紀以前にはイタリアおよびフランスにて音楽が繁栄したのであり、その事実をフランス人聴衆は知るべきであること、を主張している⁸。もう一つの方針は、「国営ラジオ局」による現代音楽のメセナである。彼は1947年に、現存する作曲家の作品の初演・再演、生計や創作の援助、作曲家と聴衆との仲介（将来の仕事の機会作り）、がラジオの役割として期待されている、と論じている⁹。

他方で、フランス周辺局（Radio Luxembourg など）との競争から国民の「国営ラジオ局」離れを防ぐ工夫も必要であった。1948年10月ラジオ総局長ポルシェは、ゴールデン・アワーの充実と娯楽番組の強化とともに、チャンネル内容に専門性を持たせ、聴衆に選択の余地を与えている。解放直後から存在した「ナショナル・チャンネル chaine nationale」（1944年9月開設）では、これまでの方針をより明確に継承して、主に文化遺産やフランスの芸術動向をできる限り広く伝える。一方で、「パリ・チャンネル chaine parisienne」（1945年1月開設）ではあらゆる娯楽を提供することを目的とした（*ibid.*:105）。1951年よりナショナル・チャンネル監督となった元音楽監督バローは、チャンネルの専門化について、威信の必要性和ラジオ放送出資者（受信料を払う国民）への見返りとの結合、と述べている¹⁰。

「戦後のラジオ、特にナショナル・チャンネルは、非常に教養重視であった。しかし大衆の嗜好は必ずしも番組監督の嗜好とは一致せず、彼らは往々にしてバラエティー番組に流れていた」（ALBERT; TUDESQ 1981:54）。それでも、ナショナル・チャンネルでは視聴率や採算を度外視して「国家の威信」を示す番組が放送されていた。芸術監督ジルソンは1954年活動報告の導入部分でこう述べている。「経済的にラジオ税（受信料）に依存するラジオ局は、大衆にある程度従うべきである。しかし国家の責任のもとにおかれた組織である以上、ラジオ局は国家の威信を担っており、したがって数の論理に屈してはならない。国家の質の高さを示すためにも、聴取量に基づきいかなる制約も課してはならないのである。」¹¹

この時期の「国営ラジオ局」は、次の三つの分野で音楽生活に決定的な地位を占めたとされる。それは、ONの名声を高めたこと、上演および作品委嘱という形でフランス国内外の現代音楽に大きな位置を与えたこと、忘却の途にあった音楽遺産を復興し再演することでレパートリーの拡大に貢献したこと、である（ECK 1997:660）。ONはパリ解放後シャンゼリゼ劇場にて毎週木曜日に演奏会を行った上、1949年10月からは1ヶ月に2回の割合で月曜日に追加演奏会を開催した。それらすべての演奏会はナショナル・チャンネルで放送された（CANTAGREL 1994:57）。次節では、このONをめぐる音楽政策に焦点を当てる。

2.2 フランス国立管弦楽団（ON）の方針（1946-54年）

1934年に設立されたONは、開戦と占領により様々な変質を被った¹²。解放後、かつての威光を取り戻すべく「国営ラジオ局」音楽監督バローは、1944年10月にON常任指揮者となったマニュエル・ロザンタール（ROSENTHAL, Manuel:1904-2003）の側に立って積極的に政治活動を行い、ONの「質」を高める政策に出た（CANTAGREL 1994:57）。

「国営ラジオ局」はヴィシー政権のRadiodiffusion nationale（RN）を引き継いでパリに3つの契約オーケストラを所有し、それぞれのオーケストラは専門分野を持っていた¹³。ONは占領下1941年にRNに再編された際、一流のオーケストラとして、RNが主宰する大規模な音楽行事や公開演奏会で交響曲や劇音楽の主要レパートリーの演奏を担当していた。バローはこの枠組みを継承しつつONに、従来のレパートリー（19世紀古典交響曲が中心）に加えて、国内外の20世紀の音楽作品の上演を要請している。さらに彼は、スタジオ録音にとどまらず、プログラム中少なくとも4つを無料で公開演奏することを実現させた（～1964）。理由は、団員に対して国際的競争に耐えうる活動を展開する意識を鍛えるため、また、従来のレパートリーに浸りきっている聴衆に入場料を気にせず足を運んでもらいONの新たなレパートリーを認めてもらうため、であった（BARRAUD 2010:404-405）。国際的に有名な指揮者も招聘し、1946年以降は積極的に外国への演奏旅行を行う¹⁴。1948年の北アメリカ演奏旅行の際にある音楽批評家が残した言葉、「ONはフランスの大使である」¹⁵は、以後「国営ラジオ局」

が自負するところとなる。こうしたONの音楽番組に対して与えられる経費は、ナショナル・チャンネルで放送されていたため視聴率があまり高くないにもかかわらず、他の番組よりもはるかに大きかった¹⁶。さらに、前述のバローの方針は団員たちにとって大きな負担であった。レパートリーの拡大は団員たちの練習時間では十分に消化しきれなかったという問題、また「演奏家の質」を保つための法（1947年3月30日）が制定され、演奏能力が不十分と指揮者に判断された団員が配置転換または失職をする可能性があったのである（A.N.:19900532/1）。ラジオ総局長ボルシェは、こうした財政問題や労働問題に直面しても、バローの方針とONを擁護していた（ECK 1997: 604-605）。

ONの新たなレパートリーとして奨励された現代曲の特徴は「あらゆる国の」作品である¹⁷。「国営ラジオ局」音楽部門に設置された「音楽委員会」及び「番組委員会」は、ONが上演する現代作品の上演時間および作曲家の国籍に関して、基準を設けた。1947年から、ONの総上演時間のうち三分の二はフランス人作曲家に割り当てられていることを示すために、ラジオ番組時間割表が作成されることになる（*ibid.*:665）。1951年バローは、教養あるラジオ聴衆がまだ18、19世紀ドイツ音楽に集中している事実を挙げた上で、現代音楽と古楽の番組をむやみに増やすのではなく、現代音楽は番組全体の三分の一の割合と定めること（このうち、約1/4が外国の音楽、残る3/4が、現代フランスの作品）、19世紀より前のフランス/イタリア音楽の復興に努めること、を方針に掲げた¹⁸。1952年、ラジオ放送予算が大幅に削減されたとき、バローは番組委員会に対して、52の交響曲演奏会番組を取り下げの必要があると発表する（*ibid.*:632-634）。それでも基本方針は変化しなかった。

ONの現代音楽偏重傾向は聴衆から非難されていたが、1954年の内閣官房長官は、ONレパートリーはクラシック音楽に特化しており、現代音楽は番組の三分の一しか占めていない、と述べたうえで、「国営ラジオ局」は採算に背いて現在活動中の作曲家たちを支援している、そして「我が国の威厳は、これまで常に文芸と文化の領域において他国の導き手であり模範となってきた」（*ibid.*:664）と主張している。

3. フランス国立管弦楽団上演の現代音楽作品：戦争の記憶を中心に

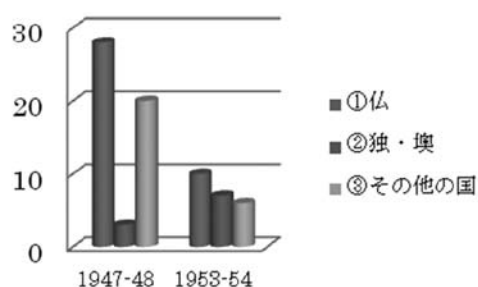
3.1 上演時期による作曲家の国籍の傾向

前節では、解放後のONが積極的に現代作品をレパートリーに組み入れたこと、その演奏時間や作曲家の国籍の割合はあらかじめ決められた枠組みをもったこと、を明らかにした。本節では、政治的力学の演奏曲目への反映を考察するために、作曲家の国籍の視点から、ナショナル・チャンネルで放送されたONの上演作品について、異なる二シーズンの番組サンプリング調査を行い、データを分析する。一つは解放から3年後の1947-48年シーズン（1947年8月28日～1948年9月30日）である¹⁹。この時期の選曲は「音楽委員会」およびバローとON常任指揮者ロザンタール（在任1947年12月まで）が中心となって行なわれている。比較対象となるもう一つの時期は解放10年目を前にした1953-54年シーズン（1953年10月2日～1954年7月1日）である²⁰。この時期の選曲は「番組委員会」による。そのうえで、1945年以降存命の作曲家を「現代作曲家」とし、18世紀から1945年までの作曲家を「クラシック音楽作曲家」としたうえで、作曲家の国籍を①フランス、②ドイツ/オーストリア、③その他の国、と分類し、シーズン中の作品上演頻度を調査した。

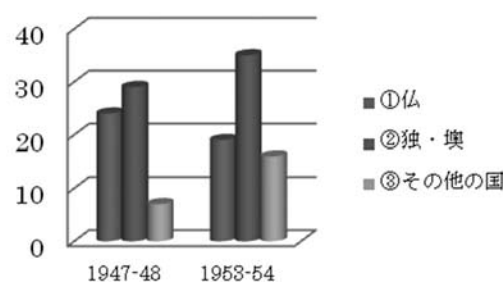
ON上演の現代作曲家の国籍を分析した結果、1947-48年は①が現代作曲家の半数以上を占めること、フランス以外の国では②の占める割合が非常に少ないことが判明した。一方で、1953-54年は、①②③がほぼ同数登場している（【表1】）。自国作曲家の保護とかつての対戦国側の作曲家の忌諱といった初期の風潮は、約10年後にはほぼなくなり、むしろ隣国の尊重および国籍バランスへの配慮が反映されていると考えられる。番組全体の三分の一の割合を占める現代音楽のうち約1/4が外国の音楽、残る3/4が現代フランスの作品、と番組委員会は1951年に規定していた（本稿2.2参照）。しかし調査の結果、規定よりも現代フランス音楽の割合は少ない²¹。

またONに上演されたクラシック音楽作曲家の国籍を分析した結果、1947-48年は従来フランスで人気の高かった②のレパートリーと①がほぼ同数取り上げられたのに対し、1953-54年は②が全体の約半数を占める他、①と③の登場回数がほぼ同じであることが判明した（【表2】）。こちらでも、第四共和政初期には自国の音楽遺産の普及を促進する努力があったが、約10年後には戦前のカノン（ドイツ/オーストリア人作曲家の作品）が優位に立つようになった状況が考えられる。

【表1】ON上演の現代作曲家の国籍



【表2】ON上演のクラシック音楽作曲家の国籍



最も多く取り上げられた現代作曲家は、1947-48年はダリウス・ミヨー（4回）とイゴール・ストラヴィンスキー（3回）である。二人はパリ占領時あるいは占領前にアメリカに逃れた作曲家である。一方1953-54年は、リヒャルト・シュトラウス（5回）が最も多く取り上げられている²²。占領下パリで音楽文化に大きな影響をもったドイツ・インスティテュートはかつてフランス音楽関係者に、彼の作品を積極的に上演するよう要求していた（田崎 2006: 85, 93）。

3.2 「戦争に関する作品」初演とその音楽批評の傾向

前節では、ナショナル・チャンネル放送のON上演作品を国籍の視点から見た場合、1947-48年は自国の音楽保護優先であったが、1953-54年にはドイツ音楽も積極的に紹介し作曲家の国籍バランスの均衡がとれてきたことを示した。本節ではさらに政治的力学の音楽への反映を考察すべく、同じくナショナル・チャンネル放送のON上演作品から「戦争に関する作品」の初演とそれに対する批評家の反応について分析する。なお本稿では「戦争に関する作品」を、「第二次世界大戦に関連する内容をテキストに持つ音楽作品、もしくは第二次世界大戦に関連付けられて語られる音楽作品」と定義する。内容に関しては、①戦勝（解放）の記念、②戦争の記録や隠喩、③犠牲者への哀悼、を中心に考察する。

今回1946年から1954年までにONで初演されたとされる、フランス人作曲家による「戦争に関する作品」²³を整理した結果、11作品（【表3】）が挙げられる。

特徴的なことは、初演が解放直後（1944年8月）から1947年までに集中している点（11作品中10作品）である。ロザンタールが1947年末にON常任指揮者を解任された後には、「戦争に関する作品」初演が1作品（1952）を除き行われていない。ロザンタールがバローとともに当時のON選曲に深く携わっていたこと²⁴を考慮すると、「戦争に関する作品」初演にはロザンタールの意向が強く反映されていた可能性もある。

1947年までの「戦争に関する作品」は、②戦争の記録や隠喩、③犠牲者への哀悼、の要素が強い。1944年11月9日初演デュティエウ《牢獄》は、レジスタンス詩人カサー（CASSOU, Jean: 1897-1986）の詩²⁵に基づいており、「強制収容された兄弟」に献呈されている（DUTILLEUX 1997:88）。1947年5月8日初演バロー《聖なる幼児たちの聖史劇》も、ドイツ軍により射殺された兄弟を献呈者とするここと、抽象的な歌詞内容を②③の要素に転換している。1945年4月19日初演オーリック《不幸なフランスの4つの歌》、同年11月2日初演メシアン《強制収容者の歌》は、「フランス」という言葉を盛り込みつつ、悲惨から希望へ向かう愛国的内容を、歌詞や標題で明確に示している。パリ解放直前の不安定な時期には、先述のカサーの詩、および同じくレジスタンス詩人エリュアール（ELUARD, Paul:1895-1952）の詩に作曲することで音楽上の抵抗を試みた作曲家が増えた（SIMON 2009:350-351, 353）。1946年7月4日初演アリュエ《戦争での愛にまつわる7つの詩によるカンタータ》もこの部類であり、②の要素を持つ。

こうした「戦争に関する作品」は初演当時、どのように評価されたか。音楽批評欄を持つ新聞²⁶を中心に調査した結果、ON上演の他作品に関する演奏評はあっても「戦争に関する作品」に関する批評はほとんどみつからなかった。すなわち、この種の作品の多くは批評の対象とならなかったことが考えられる。そのうえ、批評の対象となった時にはむしろ、その音楽美や語法が損なわれていることに対する批判がしばしば見受けられた。1946年6月6日初演ロザンタール《アヴィニョンのピエタ》について『ル・モンド』紙批評家デュメニルは、有名な

同名の15世紀フランス絵画に着想を得たこの作品が「我々が生きた悲劇的な数年間」と同じく滅亡の危機を経験した15世紀フランス（100年戦争：筆者註）を関連付けようとした意図を称賛しつつも、「和声とオーケストレーションに幾分辛辣な先入観があり、表したかったであろう感情が全く引き出されていない」と評している²⁷。また1946年11月21日初演のフランセ《優しきフランス》については、先のデュメニルと『芸術Arts』批評家アンリ・シャルパンティエが、内容が表面的であると批判、特にシャルパンティエは、この作品では作曲家の音楽的才能が生きていないことを嘆いている²⁸。

一方で、ミヨールの二作品は「戦争に関する作品」として紹介され、かつ高く評価された。ただし作品に②③の要素はなく、むしろ①戦勝（解放）の記念という性質を持つのが特徴である。1945年11月8日初演《智者の饗宴》は戦前に作曲されたバレエ音楽である。しかし『ル・バタイユ *Le Bataille*』紙批評家アンリ・ソゲは、「戦争とナチによる占領が続き、ミヨールは亡命し、彼の名前は音楽プログラムから排除された。この作品が演奏会で上演されるのはようやく今日に至ってのことなのである」²⁹として、この作品を戦争からの解放と関連付けて評している。先のシャルパンティエも同様に、この作品をフランス解放の象徴のように紹介している。「戦争勃発前日に完成させたこの作品をカバンに入れ、ミヨールはつらく長い道を経て地球の裏側へ亡命した」という前置きの後で、この作品は「世界的に非常に質の高い現代音楽の一つ」と評価しているのである³⁰。

1947年10月30日初演ミヨールの《交響曲第三番「テ・デウム」》も上記二新聞で好評を得た。この作品はその副題により、①戦勝（解放）の記念、という要素が明示されている³¹。この副題はバローの提案で、それに対してミヨールは合唱付の交響曲の形でそれに応じたとされる（COLLAER 1982:540）。ちなみにこの上演日は「ダリ

【表3】ON初演のフランス人作曲家による「戦争に関する作品」（1946-54）

通し番号	初演年月日	作曲家	作品	指揮者*1	備考
1	1944年 11月9日	H.Dutilleux (デュティエウ)	Mémoires«La Geôle» 歌曲集《牢獄》	R	声楽とピアノ(1944), 声楽とオーケストラ (Durand, 1946) 献辞「Stalag VIII Cの捕虜であった私の兄弟へ」 Jean Cassou, <i>Trente-Trois Sonnets composés au secret</i> *2 より
2	1945年 4月19日	G.Auric (オーリック)	Quatre Chants de la France malheureuse (不幸なフランスの4つの歌)	R	声楽とピアノまたはオーケストラ(1943) (Salabert, 1947) Aragon (1, 4曲目), Supervielle (2曲目), Eluard (3曲目)に基づく
3	11月2日	O.Messiaen (メシアン)	Chant des déportés (強制収容者の歌)	R	合唱とオーケストラ (1945) (Luduc, 1998) テキストはメシアンによる
4	11月8日	D.Milhaud (ミヨール)	Le Festin de la Sagesse (智者の饗宴)	R	「神秘バレエ」(1939), 全4部, Ida Rubinstein委嘱作品 台本: CLAUDEL, Paul (旧約聖書『箴言』第8章に基づく) (朗読、合唱、 オーケストラ版: Heugel 1935)
5	1946年 6月6日	M.Rosenthal (ロザンタール)	La Pietà d'Avignon (アヴィニョンのピエタ)	R	混声四部合唱と弦楽オーケストラ (トランペット付き) (1942) (Jobert, 1947)
6	7月4日	C.Arrieu (アリュール)	Cantate des sept poèmes d'amour en guerre (戦争での愛にまつわる7つの詩によるカンタータ)	R	声楽とオーケストラ (1944) (Billaudot, 1990) Paul Eluardの詩による 献呈: Hermann Moyens
7	11月21日	J.Françaix (フランセ)	La Douce France (優しきフランス)	R	オーケストラ組曲 (1946)
8	1947年 4月3日	G.Hugon (ユゴン)	Chant de deuil et d'espérance (喪と希望の歌)	R	朗読、合唱とオーケストラ (1945) <オラトリオ> テキストは作曲者による*3
9	5月8日	H.Barraud (バロー)	Le mystère des Saints Innocents (聖なる幼児たちの聖劇)	R	朗読、合唱とオーケストラ(1946)、<オラトリオ> 献呈: Jean Barraud *4 / Charles Péguyの同名のテキストによる
10	10月30日	D.Milhaud (ミヨール)	Symphonie no.3 "Te Deum" (交響曲 第3番「テ・デウム」)	D.M.	合唱付オーケストラ, 全4部, 国営ラジオ局委嘱作品 (1946), 終曲がテ・デウムのテキストによる (Heugel 1948)
11	1952年 11月27日	M.Jaubert (ジョバール)	Trois Psaumes pour le temps de guerre (戦争時代の三つの詩篇)	M	女声合唱とハーブ、ピアノ(1940) 作曲家は1940年従軍中に死亡。

*CANTAGREL 1994掲載作品に基づく。なかでも4と10は、「第二次世界大戦に関連付けられて語られる音楽作品」。備考は筆者による。公刊されている楽譜がある場合には、作曲年とは別に出版社と出版年を記している。

*1: R: ロザンタール, D.M.: ミヨール, M: ミュンシュ。

*2: 1944年5月15日, Les éditions de Minuit より地下出版された、レジスタンス詩集。

*3: SARNETTE, Eric, 1947, "Premières Auditions", *Musique et Radio: revue technique et professionnelle de musique*, no.433, 173.

*4: フランス解放直前にポルドーでドイツ軍により射殺された、作曲家の兄弟。

ウス・ミヨー・フェスティヴァル」]として、ミヨーがアメリカで作曲したフランス初演作品を集めていた。ラジオ総局長ポルシェは今シーズンのラジオ放送展望を発表する10月の記者会見で、この日の演奏会ではミヨーがアメリカから戻って指揮をすることを大きく報じている(AN:19870714/14)。実際の演奏会では、上演予定作品のうち《エクス・メ・カヌー Carnaval d'Aix》は《カヌーにより独房で作られた6つのソネット Six sonnets composés au secret par Jean Cassou》(ア・カペラ合唱)に変更されたことが今回の調査で判明した。この点からも、この演奏会ではミヨー作品は戦争・占領の記憶と結び付けられて上演されたことがうかがえる。

4. 結語

本稿では1946-54年ON上演曲目に反映された「国営ラジオ局」の音楽政策を、占領下時代の記憶との関連から考察した。その結果、対象期間を通してフランス文化の威光や創造の保護、国民教育という方針は揺るがなかったものの、初期と後期では音楽への戦争の記憶の反映という態度に温度差がみられることが明らかになった。演奏曲目全体の傾向をみたとき、初期(1947-48)に顕著であった「自国(フランス)音楽の保護」という態度は、後期(1953-54)には戦前のカノン(ドイツ/オーストリア人作曲家の作品)に立ち返る、他国(西洋圏)の音楽をバランスよく尊重する、という態度に変化している。またフランス人作曲家による「戦争に関する作品」初演は初期(1947年まで)に集中し、後期にはほとんどみられない。戦争の悲惨さを連想させる内容は音楽批評で積極的に評価されず、政治的に中立的な内容のミヨー作品が戦勝(解放)記念の象徴となり高く評価されるといふ現象も判明した。

研究者ECKは「(ラジオ放送での)占領と解放に伴う政治的断絶は、ニュースに対しては決定的であったが、番組の性質に関しては顕著な影響を及ぼしたようにはみえない」(ECK 2010:688)としていた。本稿の音楽番組検証では上演された音楽における政治的影響とその変化を見いだすことができ、当時の音楽文化を理解する上での新たな視点を提供することができた。今後は、こうした現象はもっぱら政策側の意図の反映なのか、外的影響(世論、政治・外交など)による変化なのか、あるいはONは記憶の場よりもむしろ別の機能(例えば、演奏旅行を通じての国際親善関係構築の場)を持ったのか、さらに考察していきたい。

* JSPS科研費 21720047、住友生命第2回「女性研究者への支援」(平成21-22年度)助成。

註

1. 1948年国家承認の経済努力では、劇場2億3600万フラン、歌劇場6億4300万フラン、音楽2800万フラン(計9億700万フラン)、対してラジオ・芸術部門は計10億7300万フランである(ECK 1997: 592)。
2. 1954年に、ラジオに替わるメディアとしてテレビの発達計画が開始(*ibid.*:6)。1950年初めはまだラジオが支配的であったが(家庭用TVは1%未満)、1958年にはTVに取って代われ、影響力を弱めていく(MÉADEL 1999:149)。また1954年以降、周辺ラジオ局(Radio Luxembourg, Télé-Sarre, Europe no.1)がフランス全土で放送可能になり、ラジオ局間の競争の激化が始まる(ECK 1997: 6)。
3. ラジオ放送を自律した公共サービス企業とすることが試みられるが、この計画は失敗し最後までこれに代わる法案はできなかった(*ibid.*:158)。
4. Office Français de Radiodiffusion一般部門の下位部門に「音楽委員会」があった(A.N.:19900214/5)。
5. いかなる作品も原則的にはこの委員会の審査なしに承諾され得なかった。例えば、1947年3月から1950年1月までに劇作品審査委員会では2,378作品を審査、うち351作品を採用し、そのうちの211作品が実際に放送された(ECK 1997:613-614)。
6. GANTELME, J. "La Radiodiffusion et l'art musical (1)", *La radio dans le monde*, no.18 (1948年7月), 305-308, 323.
7. 芸術監督ジルソンは音楽部門にはほとんど関与しなかった。それは、音楽監督パローがその部門において適任かつ特権を持っていたからである(ECK 1997:601)。
8. BARRAUD, Henry, 1945, "Une année d'activité musicale à la Radio française", *L'Union Internationale de Radiodiffusion*, 236号(9月), 257.
9. BARRAUD, Henri, 1947, "La radio et ses prétendants: Enquête", *La chambre d'Écho*, 27-29.
10. BARRAUD, Henry, 1951, "Grâce à la radio la musique est un art vivant", *Radio information documentation: bulletin intérieur de la Radiodiffusion française*, La Radiodiffusion-Télévision française: service des Affaires générales (éd.), no.3 (3月), 16.
11. GILSON, Paul, *Rapport d'activité des services artistiques pour l'année 1954*, vol.1, p.4.

12. まずON団員の約半数が徴兵され、そのうちの多くが1940年に拘束されてしまう。さらに団員からのユダヤ人の排除が行われ、ドイツに占領された後には解散、被占領地区にて再編成するも、団員が敗走して崩壊した地方オーケストラとの混成となる（BARRAUD 2010:404）。1941年以降再びヴィシー政権によるRadiodiffusion nationale (RN) の契約オーケストラとなるが、大幅に規模を縮小する必要があり多くの団員が職を失っている（AN: 20090288/3850）。
13. オーケストラ名と役割、団員数は次の通り: l'Orchestre national (106名) / la Radio Symphonique (現代音楽、軽音楽, 83名) / le Radio Lyrique (オペラ=コミック, 現代オペレッタ, 56名)。その他、パリの他のオーケストラがバラエティー音楽（その都度RNと契約）、地方オーケストラが小規模な交響曲や軽音楽を担当した（AN: 20090288/3850; ECK 1997:645-646）。
14. 最初の大規模な演奏旅行が、1948年の北アメリカ諸都市ツアーである。それまでにも、ONはブリュッセル、ベルリン（1946）、スイス（7都市）、ロンドン（1947）で演奏旅行を展開していた。
15. 《L'Orchestre National, ambassadeur de la qualité française》（CHACATON, Louis, 1948, “L'orchestre national de la Radiodiffusion française”, *Radio information documentation: bulletin intérieur de la Radiodiffusion française*, La Radiodiffusion-Télévision française: service des Affaires générales (éd.), no.9 (novembre), 13-14）。
16. 1949-50年約90分の劇番組が35~40万フランに対し、ON演奏会は50~80万フラン（ECK 1997.:662）。
17. CHACATON 1948:13-14（上述）。一方で、1944-45年にはストラヴィンスキー・チクルスを行うなど、特定の作曲家作品の奨励がなかったわけではない。
18. BARRAUD, Henry, 1951, “Grâce à la radio la musique est un art vivant”, *Radio information documentation: bulletin intérieur de la Radiodiffusion française*, La Radiodiffusion-Télévision française: service des Affaires générales (éd.) no.3（3月）, 16.
19. 国立公文書館に残る体系的な番組表資料は1947年以降である。この時期の番組はラジオ番組雑誌、*Radio Programme: tous les postes groupés heure par heure*に基づく。
20. 視聴覚雑誌、*Le Guide de la radio et de la télévision: supplément au Guide du Concert*に基づく。
21. 実際、委員の間でも様々な意見があったとされる。1952年12月、ある委員はフランス音楽擁護のため上記規定を順守すべきだと主張した一方で、ある音楽委員メンバーは「ラジオの役割はuniversalなのだから、フランス音楽50%、他国の音楽50%が妥当である」と述べている（ECK 1997:665）。
22. その他複数回取り上げられた作曲家は次の通り：1947-48年：R.Strauss, F.Schmitt, F.Poulenc, G.Tailleferre, G.Petrassi（各2回）。1953-54年：D-E.Inghelbrecht, Schmitt, Strawinsky（各2回）。
23. 先述の定義に基づき、CANTAGREL 1994付録資料のON初演作品表を調査した。なお標題をもたない器楽曲は対象から除外した。「第二次世界大戦に関連付けられて語られる音楽作品」については、新聞評調査に基づく。
24. この点に関しては、パローの自叙伝(BARRAUD 2010)に細かなやり取りが記されている。
25. *Trente-Trois Sonnets composés au secret* (1944年5月15日 Les Editions de Minuitより地下出版)。
26. 今回の調査新聞は次の通り：*France-soir, Le Monde, L' Epoque, Le Bataille*。このうち日刊紙 *Le Monde* (1944-) および芸術専門紙（隔週）*Arts* (1945-67) はON音楽批評をほぼ定期的に掲載していた。{*Le Monde*は解放後ド・ゴール内閣と情報省で準備され、戦前の*Le Temps*の後継紙として1944年12月創刊 (D'ALMEIDA; DELPORTE 2003:160-161)。}
27. DUMESNIL, René, “Musique,” *Le Monde* (1946年6月11日)。
28. DUMESNIL, René, “Les spectacles: les concerts”, *Le Monde*, (1946年11月27日).; CHARPENTIER, Raymond, “A l'U.N.E.S.C.O.: Francaix et Stravinsky”, *Arts*, (1946年11月29日)。
29. SAUGUET, Henri, “Le festin de la Sagesse”, *Le Bataille* (1945年11月15日)。
30. CHARPENTIER, Raymond, “A travers les salles: Le Festin de la Sagesse, de Paul Claudel et Darius Milhaud”, *Arts* (1945年11月16日)。
31. 感謝の祈祷の聖歌テ・デウムは、中世より戦勝凱旋において王侯や将軍の帰国時に市民が勝利をたたえて唱和した習慣に始まり、18世紀にはヘンデルによって戦勝の音楽という地位を確固たるものにする(上尾 2000:180-182)。

引用史料・文献（雑誌・新聞記事をのぞく）・研究文献

Archives nationales (A.N.) (フランス国立公文書館): 19870714/14; 19900214/5; 19900532/1; 20090288/3850

上尾, 信也, 2000『音楽のヨーロッパ史』東京: 講談社。

ALBERT, Pierre; TUDESQ, André-Jean, 1981, *Histoire de la radio-télévision*, Paris: Presses Universitaires de France.

ALTEN, Michèle, 2000, *Musiciens français dans la guerre froide (1945-1956): L'indépendance artistique face au politique*, Paris: L'Harmattan.

BARRAUD, Henry, 2010, *Un compositeur aux commandes de la Radio: Essai autobiographique*, CHIMÈNES, Myriam; LE BAIL,

- Karine (éds.), Paris: Fayard ; Bibliothèque nationale de France.
- CANTAGREL, Gilles (dir.), 1994, *L'Orchestre national de France: l'album anniversaire 1934-1994*, Paris: Edition Van de velde.
- COLLAER, Paul 1982, *Darius Milhaud*, Genève-Paris: Editions Slatkine.
- D'ALMEIDA, Fabrice; DELPORTE, Christian 2003 *Histoire des médias en France de la Grande Guerre à nos jours*, Paris: Flammarion.
- DUTILLEUX, Henri, 1997, *Mystère et mémoire des sons: entretiens avec Claude Glayman*, Arles (France): Actes Sud.
- ECK, Hélène, 1997, *La radiodiffusion sous la Quatrième République: monopole et service public, août 1944-décembre 1953*, Thèse, Université de Paris X II.
- ECK, Hélène, 2010, "Radio", DELPORTE, Christian; MOLLIER, Jean-Yves, SIRINELLI, Jean-François (dirs.), *Dictionnaire d'histoire culturelle de la France contemporaine*, Paris: Presses Universitaires de France, 686-691.
- JEANNENEY, Jean-Noël 1996, *Une histoire des médias: des origines à nos jours*, Paris: Seuil.
- MÉADEL, Cécile, 1999, "1954-1962: Quels programmes pour la radio?", *Radio et télévision au temps des « événements d'Algérie » 1954-1962*, BUSSIERRE, Michèle de; MÉADEL, Cécile; ULMANN-MAURIAT, Caroline (dirs.), Paris: L'Harmattan, 149-162.
- PROT, Robert 2007, *Précis d'histoire de la radio and de la télévision*, Paris: L'Harmattan.
- SIMON, Yannick, 2009, *Composer sous Vichy*, Lyon: Symétrie.
- 田崎, 直美, 2006 「占領下 (1940-1944) バリの音楽界におけるドイツ当局の影響: 国立オペラ劇場連合 (RTLN)の場合」『人文科学研究』(お茶の水女子大学), 第2号, 83-96.
- 田崎, 直美, 2011 「フランスの戦後復興期における芸術音楽の役割: フランス・ラジオ局 (Radiodiffusion Française (1945-49年)) の音楽政策の検証より」『人文科学研究』(お茶の水女子大学), 第7号, 99-111.